

＜定例研究会報告要旨＞

第 1729 回 (10 月 9 日)

園芸作の展開と上層農家

——1995 年農業センサス分析——

香 月 敏 孝

本報告は、1995 年農業センサスに示される農業生産および経営構造の動向を、主に上層農家の存在状況とそれを支える経営部門の展開との関連において分析したものである。

上層農家を捉える経営規模指標としては、従来あまり用いられなかった労働投下日数規模基準に注目し、年間投下 500 人日以上層の動向を中心とした検討を行なった。

ところで、500 人日以上の農家数は都府県で 64.3 万戸（販売農家のほぼ 1/4）であり、しばしば耕地面積規模で大規模農家層とされている 5 ha 以上の農家の 3.6 万戸と比較すれば、かなりの量の農家層を対象としていることになる。

この 500 人日以上層に販売金額基準の大規模層（例えば 700 万円以上販売農家）も、ほぼ包含されており、これら農家層を支える経営部門としては近年、園芸作の位置づけが高まっている。

このため、本報告では、経営部門としては、園芸作の動向を主に分析の対象としている。明らかにした点は以下のとおりである。

第 1 に、労働投下日数規模が 500 人日以上層の農家は、2 名以上の専従者をかかえる夫婦専業的農家であり、これら農家層の各生産部門（とりわけ園芸作部門）での位置づけが高まっている。

第 2 に、これら上層農家の存在割合は地域差が極めて大きいことである。この地域差は、地域別にみられる園芸作展開の密度の差によって規定されるところが大きい。

第 3 に、上層農家の経営展開を支える園芸

作内部の動向として、施設園芸作は花き部門を中心になお生産拡大の傾向がみられるが、露地野菜作は生産の後退がみられる。園芸作内部における展開の方向は、必ずしも一様ではない。

第 4 に、園芸作部門においては、規模拡大が進展しており、施設園芸で 50 a 以上、露地野菜で 2 ha 以上といった農業センサスで捉えられる最大規模層での生産シェアが拡大している。

そうした中で、園芸作農家における経営部門の専門化（単一化）の傾向が強まっている。

第 5 に、しかしながら、園芸作部門は、複合経営によって担われている生産部分が、なお大きい。

園芸経営として専門化を進め規模拡大を指向する農家層がある一方で、園芸作を複合経営の一環として付加的に取り込もうとしている農家層もなおかなりあるからである。

そして、いずれの方向も夫婦専業的農業の経営維持を図る展開という点では共通する対応とみることができる。

第 6 に、これら園芸作シフトともいえるべき対応を図っている上層農家は、近年に至って農家数の減少と高齢化が平行して進展している。

こうした状況の下で、園芸作上層農家において雇用型経営が形成されつつあり、ここに産地再編に向けた取り組みの一端が示されているといえる。

最後に、園芸作の今後の展開をめぐっては、労働力の減少と高齢化に対処するための園芸産地の再編に向けた組織的な支援活動の重要性が指摘される。